

いい人

千

葉県野田市の小学四年の女兒が、父親からの虐待で死亡するといふ痛ましい事件が、連日のように報道されました。この事件の張本人は父親以外の誰でもありません。しかし、女の子の命を救えたかも知れない大人達の対応にも、多くの問題があったことも明らかになっています。非難の矛先は、専らこの事件に直接関わっていた児童相談所の対応の杜撰さに集中しています。

しかし学校・教育委員会にも大きな問題点があります。特に秘密を守りますとの約束に反して、父親からの虐待について記した女兒のアンケート調査を、教育委員会が父親に提示してしまったことは重大です。テレビに出た当の教育長は、父親の異常なまでの暴力的な態度と法的に訴えるという威しに屈して、アンケートの回答を提示してしまつたと話していました。その発言を聞いて私は自分の耳を疑いました。これで、教育長が務まるのだろうか。周りの教育委員会の職員達は、どうして提示することを止められなかったのだろうか。それとも、提示することで自分達に降りかかろうとしている難を逃れようとしているのだろうか。この事件に拘わつた教育関係者達のあまりの不甲斐なさに、齒を噛む思いです。

テ

テレビで教育長の発言を聞いた時、私は「いい人」という言葉を思い出しました。国語教育の研究者で生涯に渡って一國語教師を買き通した大村はま氏の『灯し続けることば』という本の中に、教師は「いい人」であたりまえ、悪い人では困りますというようなことを書いているのを思い出したのです。正にその通り、教師たるものが悪い人では話になりません。いい人で当然なのです。しかし彼女が言いたいのは「いい人」だけではいけない、教育者は教える技術をしっかり持っているなければならないと論じているのです。

私

は、彼女のこの言葉の中に更なる意味を感じるので。教師であるという信念を持ち、様々な外圧に屈することなく子どもを育てて行きたい。そのようなメッセージをその文章の奥底から感じるので。この著書『灯し続けることば』は、今、私の手元にはありません。ある学校を去る時、傍目にはいい先生と見なされている方に差し上げました。これを読んで本当に生徒のことを思う教師になつて欲しいとの思いでした。

私が現職の頃、保護者から教育委員会に直訴されたことや、立派そうな肩書きを持つ人と対峙したこと、更には「如何にこの校長はよくないか」という文書を議員に送られたこともありました。教頭先生をはじめとする学校の先生方の協力で支えられて、理不尽な外圧に屈することなく、ことを納めることが出来ましたが、支えになると思っていた所は支えとはならず、私個人として弁護士に相談しながら、自分を支えたことも事実です。

教師

は「いい人」だけではすまないのです。時には生徒に厳しく接しなければならぬことがあります。それによって嫌われることも、反発を招くことも、保護者からクレームを突きつけられたり、脅されることもありました。そのような経験を踏まえて言えることは、学校に対するクレームや外圧対応は学校全体が一丸となつてあたるべきことです。激しいクレームをつける人には複数の教員で対応する必要があります。そして、問題の中身を教員全体で共有しておくことが大切です。その為にも学校内のより良い人間関係の構築が必要不可欠であると思ふのです。学校現場の先生方が、一番よく、学校のことを知っているという自負は忘れてはなりません。

(元青森県立北斗高校校長)